

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	エロトペグニア（一）
Author(s)	土居, 英樹; 福田, 耕佑
Citation	プロピレア , 29 : 157 - 145
Issue Date	2023-12-30
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00054851
Right	Copyright (c) 2023 日本ギリシア語ギリシア文学会
Relation	



【ビザンツ詩翻訳シリーズI】

『エロトペグニア（二）』

土居 英樹 訳

大阪市立大学文学部世界史学教室

福田 耕佑 共訳

大阪大学大学院人文学研究科外国学専攻

日本学術振興会特別研究員 (PD)

「もし私が、お嬢さん、君がいつ出発して、

令嬢たちとどこを通るか知っていたら、

太陽が君をとらえぬよう、君の通る道に林檎と榲桲^{ツツミ}、

橙と檸檬、月桂樹と銀梅花、バラの木を植えたのに。

君が行きかい足の踏むところが香るよう

麝香をかぐわせればよかった。

たおやかなる人よ、君に知られることなく、

太陽に君の妙齡が焼かれぬようにとね。

お嬢さん、謙虚になると決めたんだ。

お嬢さん、君と語らつて、君の素晴らしい気品には

— 恥じいったよ。

お嬢さん、君はつれなくて、言葉が届きはしないから

惨めな気持ちで、語らうのも怖いよ」

そうして、今度はたおやかな人が若者に語りかけた。

「話してよ、ねえあなた。私と何を話したいの？」

ためらわず話し。あなたは何も怖くはないのでしよう」十五

「お嬢さん、君とキスがしたい。もし、それが君の望みなら

もし、僕を好いて、仲良くしてくれるなら。

何が君の役に立つのだろうか？ お嬢さん

君は胸を張って僕を悲しませて、酷く悩ませるのに。
キスすると誓って、それを与えておくれ、高貴なお人」二〇

「可愛いあなた、あなたは愛のため、
私のすぐ隣にキスしに来てくれないのね。

あなたを見つめて、悩まされ、大きなため息をついてしまう。
ねえあなた、覚えているのかしら。私と結んだ誓いを。
あなたは誓って告白したわ、

—私を決して見捨てはしないと。
今、私の目が見つめている時も、他の女にご執心？
昨日、あの女と過ごして眠っておいで

私の所に来て言うのね、監視塔にでもいたのかつて。
私は衛兵全員に尋ねに行ったの、
彼らは誓って言ったわ、誰もあなたを見なかったと。
そうして誓いを踏みにじって、大罪を犯したのはあなた」

「僕の右手に立つておくれ、たおやかな人よ。

—話がしたいんだ
君に乞い、かつ願おう。君がどれほど僕を愛しているのか
言っておくれ。僕は応えて君を愛すから

君を愛しすぎはしない。君が自惚れるから。 三五

もし、僕が乞い願うのを誇りに思うというのなら、
言ってもいい。誰もそんなことは知らないよ。

お嬢さん、君は誰かに他の男にあてがわれたと言ったね。
誰かが男を紹介してくれたなら、別の男を選べば
—よかったのに。

僕が暮らし眠る場所を、君は考えなくてよかったのに。 四〇
僕がどの女に眼差しを投げ、誰と言葉を交わすのかもね」

「ねえあなた、知っているでしょう。私は全くあなたを
—知らなかったし

会ったことも、見たこともなかったし、詳しく知りも
—しなかった。
あなたの妙齢に一度も視線を投げかけたこともなかったわ。

私を妻に選びとろうとする人さえるの。 四五
今となつては、あなたの知性と美しい言葉、
甘い上目遣いと素敵な作法、

巧みな技で私を虜にしていたの。
私の屈しない心を隷属させて
私が奴隷となつたのは、あなたの命令のせい」 五〇

「お嬢さん、君の隣人は僕たちの愛に嫉妬しているよ。愛が鉄塔のように力強くそびえ立っているからね。彼らは愛が黄金の鎖のように編まれたのを見てとても不快に思っているんだ。僕たちを別れさせる気だ。」

目はこれを見たがらず、魂もこれを享受したがない。五五僕たちの愛を望まずとも、その目でこの愛を見ることだろう。味方はこれに悩まされ、敵がこれを愉しむ。

何の過失や根拠もなしに僕たちを引き離そうとしたのだから」

「私の謙虚で善良な心があなたを求めているの。しなやかで枝のように細いあなた。

あなたは、私に魔法をかけたのね。いつもあなたを―思い出してしまふから。

あなたの有り余る愛はどこで私を見つけて、貼り付いて―きたのかしら？

それは私に入り込んできて、心の奥底でとぐろを巻きそれは入り込んできて、根を張って葉で満たしたの。

隣人がやって来て私に忠告したの。皆があなたを忘れるようにと。

それで私は答えて、あの人たちを責めましたのよ。

六〇

あなた方もよほど私たちの別れを望んでいるんでしょうね。だから、あなた方も彼を忘れるようにと忠告して―くるんでしょうね。

たとえ刃に切り裂かれ、鋸に引かれたとしても私が生きて姿ある限り、必ずあの人を愛するわと」

「ねえあなた、彼らは私を妻にとろうとしているの。ねえあなた、私もそれを聞き知っておぞましく思い心から泣き叫んだわ、世界がそれに驚くほど。

私が他の男に流し目をやって、あなたを忘れたとしてもあなたの有り余るほどの愛が揺らぐことはなかったのだから、どうして私があなたを拒むというのでしょうか、

―私の肉体の主人、私の心をその手で掴んでいる主人、

ねえ、あなたは私の心から揺らがない人になつたのよね？」

八〇

「お嬢さん、どんな利益があつて、お嬢さん、―どんな得があつて

愛の試練を受けた気の毒な男を取り逃がして愛するより良い人を取り逃がしてしまうのでしょうか？」

お嬢さん、愛らしい貴婦人、私の女王よ

君の小さな目は世界を愛で満ちたし、

君の唇は恋の鎖を編んでいる。

たおやかな人、君は良いご身分だね。僕に少しでいいから

—恋心を送ってほしい。

—この君のお嬢さん、君のたくさんの愛で僕は

—気絶してしまふから。

君は恋心を持ち続けて、僕に愛を与えてほしい。

お嬢さん、夜も昼もあまりに苦しいんだ

身内も赤の他人までも僕を傷つけてくるから」

「若く美しいあなた、悪いのは私だと言うのね。

私に非難を投げかけて、私が悪かったと言うのね。

私は自分を捧げて、あなたの望み通りやってきたというのに。

あなたへの愛ゆえに、女奴隷すら傍に仕えさせ

—なかつたのに。

私を忘れず、捨てず、他の女とキスもせず

美しい他の女を遊んだりもしなかつたことを

あなたは自画自賛していたけれど」

「君は僕と一緒に、一ヶ月も二ヶ月も、

八五

一週間さえ過ごしてくれない。君は苛々し始めて
抑えも効かなくなつて自分は少女なんだと
—威張り始めるものだから。

君の隣人たちは僕の名譽を汚すようなことを言つてきた。

お嬢さん、僕はそれを聞いておぞましく思う。

僕は五日間、君に挨拶もせず

君の側や近所を通ることもしない。

僕は君の隣人から非難されようとも

恥を忍んでまで挨拶しようとは思わない。

お嬢さん、もし僕を侮辱するなら、大罪を犯すのは

—君なんだよ」

第二部

ああ悲しいかな！ しなやかな人よ、君は僕に苦しみを注ぎ

僕の心を燃やして、魂を枯れさせる。

僕は慌てて君を見る、瞬きの間息をするために。

今度は少し君を見つめ、掘り起こされた死体となつて

—出かけよう。

九五

一一〇

一〇五

声が出なくなつて痺れてしまふよ、ご令嬢。

自分の衣裳棚に戻ると、気絶して倒れてしまふ。

僕は君の愛に落ちてしまい、隷属させられてしまつた。二二五

君の麗しさが僕を苦しめないようにと懇願しよう。

君の光輝なる妙齡、驚くほどの麗しさ

君の愛らしい顔が僕を燃え上がらせた。

少女よ、僕と話すのに良い場所と口実を見つけておくれ。

僕の心を燃やすような、君が僕の言葉を聞いて

—くれるような。

二二〇

夜と昼の間は君への欲望に燃やされる

一度くらい、君の紅い唇にキスしたいという欲望に。

君は、僕の両目を奪つてしまい、心も砕いてしまつた。

驚くほどの君の麗しさは、僕の心から奪われやしない。

僕は鳩になつて、君がまどろむ場所にやつて来よう 二二五

君を雁字搦めにしよう、君がいつも僕を忘れないように。

月よ、君が輝かせ続ける限りは、滅することのない光よ。
いつも僕と共にいてくれるのは君だよ、ご令嬢。

何があつたのか、ご令嬢、どんなことがあつたのか、

—どう思っているのか？

だから何も返事を書かずに、僕をこんなにも

—悲しませたのか。

二二〇

愛らしい君にキスしよう、君の紅い唇に何度もキスをしよう

そして何度も抱擁しよう、君の心地良い美しさを。

心からの挨拶を君に送ろう、美しき少女よ

何度でも最愛の君の妙齡を抱擁しよう。

僕は謙虚で嘘をつかない。眠れない夜は

君への欲望から心が穏やかになることはない。

二二五

猫のような眉の少女よ、僕の目の光よ、

心に抱える痛みの憩いよ。

君の胸でまどろむことにしよう、何が起ころうと、

―なるようになれ。

第三部

再び君に会うのはいつになるだろう。君と話すのはいつになるだろう。 一四〇

そして、君に物語るのはいつになるのだろう。君のために、

―惨めな愛のために

軽蔑される熱情のために、私が悩み苦しんだことを。

君はいつやって来て、私の側に立ってくれるのか。

―たおやかな人よ、

勇気を出して、愛の痛みについて話そうか^三。

私は常に君のため、それらを抱え、身に受ける。

血の涙を流していつあなたと出逢い、

重くため息をつき、心を痛めて嘆くことになるだろうか。

君はいつ私を見つめ、悲しみ、心を痛め、

―待ってくれるというのか。

たおやかな人よ、私はいつ君と優しく語らって、 一五〇

熱情の試練を物語ることになるのだろうか。

そして君のために抱える痛み、苦しみを。

恋は私の喉を引き裂き、愛は私を切り裂く。

君に愛の詩を送ってあげよう。

君のために編み上げた、惨めな詩という装飾を。 一五五

その詩は私の心の中から引き抜かれたものだ。

たおやかな人よ、植木鉢にバジルを蒔くように

それを君の胸の中に置き、君の行き交うところは君が香り

通りかかった皆がそれを見て、その香りを聴くことだろう。

そのように、私は自分の心から詩を引き抜いたのだ。 一六〇

君の言葉で、鎖のように編み上げた。

そして、私がそれらを描き出す時には、たおやかな人よ、

―君はその言葉に耳を傾けるだろう。

さあ、愛の痛みを君に語ってあげよう。

眉目秀麗な少年が、麗しい少女を愛している。

二年も経てば、少女の愛が彼を枯れさせて 一六五

少年はたおやかな人の熱情の中でしおれてしまい

彼女に夜明けを知らせた。「私のお嬢さん、君を愛しているよ

私のお嬢さん、密かに愛しているよ。君はそれを

―知りもしない。

私が密かに苦悶し、辛抱しているのは

―目に見えているのに―

たおやかな人がそれを聞くと涙が流れ出て

一七〇

彼女は言伝を送る、それを聞くのを望まずに。

「あなたはまだ小さな子どもで、キスも知らないじゃない。

どうして私を愛しているなんて口から出して、

―言ってしまったの。

人は私の手足を切り裂いたけれど、あなたは私の心を

―枯れさせたわ。

もし、隣人たちがそれを聞いたなら、皆が私を

―咎めたでしょう―

一七五

その時にまた、若者がたおやかな人に言う。

「たおやかな人よ、僕がキスも知らないことを

―どうやって知ったのか。

まず初めに、僕を試してみて、その後で僕に尋ねて

―みたらいい。

君は小さな人のキスと巧みさを見て、

どうやってキスを褒めるのだろうか、どうやって恋心の舵を

―取るといふのだろうか！

一八〇

松の木は、大きな木ではあるけれど、果実は作らない。

その穂はとても小さい。松が果実を産むのを君は

―見たことがあるか？

逆に君が見つめる葡萄の木は果実を作り、

夏は……酸い葡萄を食べべ^四、

一八五

冬の中では葡萄酒を飲む。

そして、たおやかな人よ、もし君が信じないなら、

―もし君が知らないのなら

コルクの靴を投げ、庭に入っておくれ。

小さな林檎の木を見て、大きな林檎の木も見ておくれ。

どうやって松が大きな林檎の木のように風を

―受け取れるのか―

一九〇

その時にまた、たおやかな人が若者に言う。

「百の言葉をあなたに尋ねましょう、若い人。

もし、あなたが確実に聞き分けることができるというのなら、

―キスを与えてあげましょう―

その時、若者はたおやかな人に言う。

「お嬢さん、私は君の言葉を全く知らないが

一九五

私は考えをまっすぐと筋立てて、その知を捉えよう。

たおやかな人よ、君はそれらを測っておくれ。そうすれば

―それらを見分けよう。

少女に目を向けると、彼女は私を網に捕まえてしまう。

鳥もちを塗った竿に私を引きとどめ、私は我を忘れてしまう。

私の心を奪ったのは、しなやかな枝のような人よ、

—君だけだ。

二〇〇

愛を信じないと誇りを持って言ったのに。

そして君は、巧みに投げ縄で私を捕らえて

君の愛は私の心の底に根をはってしまつた。

たおやかな人よ、君は両目を悲しませ、二つの心を

—枯れさせて、

君の多くの愛で二つの胸は炎を上げて燃える。

二〇五

君の心は石のように堅くて瘁猛、

思考は鉄のようで、唇は閉ざされていて

決して言葉を失わず、優しく私と話してもくれず

慰めてくれないから、私は心を痛めているよ。

三年間、もし君のために鉄の中に

—入れられたとしても、

二一〇

大いなる君への愛のおかげで、三時間のように感じるだろう。

いや、お嬢さん、キスのせいでも、他の恐怖のせいでもなく

鉄のせいで自分を忘れるだろうと君は言う。

私は生きて姿ある限り、心に君を抱えて、

君の愛が私を燃やし、それに耐えることが

—できない。

二一五

五回も一日に気を失つてしまふよ、私のお嬢さん。

だが君は何も言ってくれない。気を失つてしまふよ、

—私のお嬢さん。君のせいだ

毎日死に瀕して、五回は君を思い出す。

一回は朝に、一回は夜に、そして三回は昼に

そして日没まで私は耐えられない。

二二〇

私は君の門前に立ち止まり、人々は君の二つの林檎を

—見つめる。

君の肢体は光り輝き、愉しませてくれる君の美貌。

君の妙齢は麝香とアロエの香りをかいで

君の唇は薔薇で満ち、君の眉はジャコウネコのように

君の舌は甘い声を話し、蜂蜜に砂糖のよう。

二二五

君の悦びに満足し、君に干上がってしまう。

七つの魂を、たとえ造物主が私に投げ入れたとしても

君の豊かな愛がその七つを私から引き抜いてしまう

—ことだろう。

私が死ぬ時、君のために死に瀕し、病や痛みから離れる時も
天使は私を連れて行きはしないだろう。 二三〇
たとえ君が望んだとしても、たおやかな人よ、
—私は死にはしないのだ。

九匹のヤマウズラが空の上を飛んでいる。

一匹は黄金の翼で、君はどれだ、と私は言った。
私は立ち止まってよく考える、どのヤマウズラを
—捕らえるかを。

地面に網を敷いて、美しいヤマウズラを捕らえよう。 二三五
君のようで、君によく似ていて、君の妙齢のようだ。
ほっそりとして、紅い唇の、低い声でさえざる

バラのように白く、薔薇のように紅く
甘くさえざるヤマウズラ。君は大勢の心を枯れさせる

十本のとげを、お嬢さん、君は私の名前の方へ翻し 二四〇
それらを私の上に置き、私を殺めることだろう。

君は悪をなすために誰に対してもそれらを置いたりはしない。
君は愛のためにそれらを置き、痛みが私を切り裂いてしまう。
君の愛が私を枯れさせて、私は耐えられない。
君を思い出して枯れてしまい、君を見つめて

—青白くなってしまおう。
そして、たとえ眠りに落ちたとしても、私は眠りに
—満足することはない」

その時にまた、たおやかな人が若者に言う。

「最初に、私は知っている。自分はあなたにキスを
—与えたいと思っていることを。

私の自尊心が邪魔をして、あなたにキスを与えないと
—言っただけだ

あなたは巧みさと善き考えでもって 二五〇
屈することのない私の心を隷属させたのよ。

あなたの愛を受け入れて、私はあなたの踏む道、
行き交う大地になるという望みを叶えてあげましょう。
詩を切り分けるためにあなたの言葉を選び分けてね。

昼時が来たわ、食事をとりに行きましょう

あなたが着替えて楽しめるように、シャツを持って 二五五
—いきましよう。

というのもあなたが着ている服はとも埃まみれだから。
私たちは甘くキスをしましよう。老いが私たちを見つけて
死が私たちを捕らえ、土が私たちを食べてしまいう前に」

二十の林檎が黄金の皿に横たわり
君の両唇のように甘くて赤い。

私はそこに立ち、林檎が欲しくて堪らず言う。

—《林檎を持っていたらなあ。

夜の匂いをかいで、静かに眠りに落ち

彼らが夜にキスをして、私が慰めを受ける。

私が慰めを感じるよう、君が私の脇に

—いてくれるように》

二六〇

私が哀願しているということをあなたが誇りに思つて

—出かけていたのだから、

でも私も度々通つていたからあなたは世間の

—知るところとなり

あなたが私を拒んで、もはや私を欲していないと彼らは

—言うのだ。

それ故に私を切り刻み、私は悲しみ、大きなため息をつく。

二六五

五十の泉がたとえ百の緑濃い峡谷から流れ出て

—きたとしても

君の門にやつてきて、それが君の望みであり、

—私の手には黄金の桶、

私は君の眠るところにやつて来て歌い、君を起こし、

大きなため息をつく。

桶を満たそう、たおやかな人よ、

君への愛のために燃え上がる私の心を湿らすために。

たおやかな人よ、私は心の火を消すが、君は心に

—もつと火をつける。

たおやかな人よ、たとえ君が自分の手で心に

—水をかけないとしても

たとえ私が心に川をかけたとしても、私は心を

二八〇

三十の枝をもつた糸杉よ。君には黄金の枝と
大きな葉と大きな木陰

甘い風と数多の露

薔薇の植えられた美しい庭園がある。

私の赤く甘い林檎と積まれた林檎が

私が君の木陰に留まれるように、君の木陰で涼み、

そこで涼を納れることができるように君の若さを

—傾けてくれた。

二七〇

四十ひろの固められた地面を

私はあなたへの愛を隠すために掘り出して、

—あなたは愛を露わにした。

二八五

—全く冷やせない。

ほくそ笑んでいるのだろう、たおやかな人、

—私を無視しないでくれ

君からすれば私が異国の人間で親類ではないからといってね。

たおやかな人よ、もし君がキスを交わすことを

—望むのなら

私たちの友人はそれに喜び、私たちの敵はそれを

—悲しむことだろう。

七十もの扉付きの鳥籠が私の庭にあつた。

私の鳥籠には飼ひ慣らされたサヨナキドリがいて

甘い話し声、極めて美しく素晴らしい羽毛で

何日と何時間の後、そのサヨナキドリは有名になつた。二九五

他の狩人が彼女を捕らえて、何度も甘くキスをする。

私が近隣と細道を渡る時、

彼女が歌っているのを聞いて、手足は震え上がり、

心は枯れてしまつて、慣れきつた彼女の鳥籠の方へ

振り向くまでの間も耐えることができない。

三〇〇

八十回も、私は君のせいで傷ついてしまつた、

—私のお嬢さん。

使者でもって言伝えしよう。

お嬢さん、君の奴隷のために想つてほしい。

—私を想つて私を買つてほしい。

昼も夜もあなたに隷属するために。私の女主人よ。

夜はランプの真ん中に蠟燭に火を付けよう

君を照らして、君の奴隷として夕食をとるために。

三〇五

九十の我が入り江をも君の愛は打ち壊し

全ての心を略奪し、怖がらせる。

たおやかな人、君はほくそ笑むだろう。あなたは利益を得て、

私たちの愛を捨てて、私を死に至らしめるだろう。

三〇〇

私のお嬢さん、君は失つてしまふよ、君を愛する

—麗しき若者を。

百年がたとえ過ぎたとしても、君は私にキスを

—与えてくれることだろう。

そして、お嬢さん、どうして今日も明日も、

君の甘い愛や待ち伏せで私をいじめるのか、女主人よ。

賭けは満たされた。さあ、お嬢さん、おいで、

—キスをしよう。

三二五

さあ、おいで、お嬢さん、永久の愛を営もう」

そして彼はその手で彼女を挿んでベッドに行き

熱烈に欲するまま、満足するまで彼女にキスした。

キスした後に起き上がって彼女をからかう。

その時にまた、たおやかな人が涙を流す。

「あんた、あんたの心が石のようで」

三二〇

嘘つきで、口論好きで、騙してキスをしていたことを

知っていたなら、あんたに太陽の美しさを

―手にするキスなんて与えなかったのに―

その時にまた、若者がたおやかな人に言う。

「私を馬鹿にするな、この醜女。私を罵倒するな。」

三二五

見るにも耐えず、厚い唇、低い眉、その黒さ。

おまえは着飾っているが、醜くて、身体を洗っても黒い。

おまえが浴場から出てくる時は、野蛮なカーディーのようだ」

その時、またたおやかな人が若者に言う。

「私を侮辱しないで、若者よ、私を罵倒しないでよ」 三三〇

注

一 本作品は *Ανώτερος Συγγραφέας* (1956), *Εφοροειρήνεια, στο Βούζωνη Παιδί, Γεώργιος Ζάπος (επιμ.), Αστός -Βασική*

Βιβλιοθήκη, Αθήνα, σ. 254-270. の第一部から第三部まで、二五四頁から二六一頁までを訳出したものである。編者のソラスによるが、本作品はビザンツ末期に編まれたものとされて

いるが、著者や執筆地を含めその多く点が明らかに成っていない。また口語で編まれた詩文は大部分が十五音節弱強格で押印は無く、言語的にはロードス島やその他エーゲ海島嶼部のギリシア語の影響がみられる (Zolpa, 1956, 47)。そもそも文体や綴りの不統一の観点より本詩の著者は一人とは限らないと考えられる。複数の著者によるものという推測が正しい場合、ビザンツ末期の一時期ではなく、ある程度の時間的広がりをもって口承された複数の詩をまとめたものとして見なされる。第三部以降で、第一回十字軍の時期からビザンツ軍の中で役割を担い、末期まで利用されていたとされるキリスト教徒トルコ人傭兵 *Touprokatoïai* (第四部の四四九行目) や、中期から末期にかけて様々にその地位や職能を変えた官職である *Λογότερις* (第四部の五六一行目) への言及など、中期ビザンツ以来の用語への言及が存在することもそれを示唆している。なお当翻訳では、それぞれの部ごとに異なる男女二組が言葉を交わしているものと解釈して訳出している。

また訳文中に「―」のある箇所が存在するが、その箇所は原文では一行で記載されているが本翻訳では一行に収まらず二行になっている箇所であり、本来は一行続きであることを明示するために「―」を入れている。

二 本翻訳ではカタカナの「バラ」と漢字の「薔薇」が登場するが、それぞれ *ῥοιαντάριον* をカタカナ、*πόσον* を漢字で表現している。

三 この個所の一四〇と一四五の行数の配置は実際の行数付けとしては誤っているが、原文に準拠したものである。

四 この個所の一八〇と一八五の行数の配置は実際の行数付けとしては誤っているが、原文に準拠したものである。

【謝辞】

本翻訳にあたって、訳文の確認と詩文作成において早稲田大学文学部西洋史コースの戸田翔氏の助力をいただいた。ここに感謝の意を表明する。